

社会イノベーション研究
第10巻第1号(113・138)
2015年1月

2014年11月28日掲載承認

戦争の反省はどのように受容されたか： 歴史認識の多元性をめぐって

石 田 隆 至

はじめに

先の戦争をめぐり歴史認識が東アジアで国際問題化して久しい。近年では学術的に確定した「事実」にさえ基づかない歴史観が跋扈し、排外主義デモが展開されるなど問題はより深刻化している。旧日本軍や戦前日本社会の犯罪性を否定する動きはもちろん、被害国からいつまでも戦争責任を問われ続けるのは不当だという声が支持を拡げている。

90年代に歴史修正主義が台頭した際、敵対視された組織の一つに中国帰還者連絡会（以下、中帰連）がある。同会は、戦時中の自分自身の犯罪行為を伝える反戦平和活動を行ってきた元戦犯たちで構成され、明確な加害認識を伝えようとする数少ない戦友会的組織である。1997年6月には「自由主義史観」からの攻撃に応戦するため、会員の平均年齢が70歳代後半に達していたものの、季刊誌を創刊するなどして一定の存在感を示した。同人誌ながら創刊号は3度増刷するほどの反響で7,000部が購読された¹⁾。

むろん、現在の日本の言論状況をみると、彼らが社会に伝えようとした加害認識は十分な拡がりを持ったとはいえない。いや、掻き消されつつあるとさえいえる。そこで、明確な加害認識を伝えようとしていた人々であっても、周囲にそれを拡げることがいかに困難であったのかを確認すれば、戦後日本社会

1) 『季刊中帰連』第5号(1998年6月)75頁。

において加害者性に向き合わない社会的風潮がなぜ強いのかを考える手がかりになるだろう。

中帰連が社会的認知を得るのが1990年代に入ってからとなった事情について詳しく振り返る余裕はないが、90年代のような言論活動を展開する志向性自体は、1956年夏に彼らの多くが帰国してから一貫して存在したものの、それを受容する社会的、政治的状況が乏しかったことが大きな要因となっている²⁾。とはいえ、中帰連としての組織活動にとどまらず、周囲の戦後世代の人々に分け入って平和運動を展開した元戦犯もいた。

例えば、大阪にいた佐藤栄作は底辺労働者や日中友好運動に取り組む青年たちと共に、詩や絵画などの文芸表現の形で平和活動を推進し、1962年から80年代に至るまで同じく元戦犯の藤原恒男と協力してガリ版刷りの詩集『ていへん』などを発行していた。初期の本部事務局長だった塚越正男は、1960年代末以降は中帰連から次第に離れて新左翼運動などに飛び込んでいった³⁾。彼らの周辺にいた人たちは、強制連行問題や細菌戦被害者訴訟などそれぞれの領域で平和のための行動を今も続けている。

本稿で取り上げる笠 実^{りゅうみのる}（1906年福岡県久留米市生まれ、1996年同地で没）もまた周囲の人々の間に分け入り、戦争経験および戦犯収容経験とそこから得た「戦争認識」を様々な形で晩年に至るまで伝えようとしてきた足跡が見られる。本人あるいは周囲の人々はまとまった著作を残しておらず、断片的な情報しか得られなかったため、2011年秋に笠と交流のあった人々を訪ねて集団あるいは個別インタビューを実施し、資料の提供も受けた。15年も前に亡くなった一民間人に関する聴き取りでありながら、久留米市と柳川市で合わせて17名の人々が集まり、一様にその存在感の特異さに言及していた。時代や世代によって笠の受容のあり方に差はあるものの、そこから笠が何を伝えようとし、それがどのように受け止められたのかを、一定程度知ることができた。そこで見出したことは、加害の側面にも重点を置いた戦争体験そのもの以上に、

2) 詳細は、同会の一支部の歩みをまとめた、石田隆至・張宏波「加害の語りと戦後日本社会（4）戦争を推進した社会の転換へむけて（上）：山陰支部における『相互援助』を中心に」『戦争責任研究』76号、2012年6月、67-78頁.; 同「加害の語りと戦後日本社会（5）戦争を推進した社会の転換へむけて（下）：『相互援助』が可能にした『加害証言』」『戦争責任研究』78号、2012年12月、63-74頁。

3) 石飛仁・由木栄司ほか編『青年よ、侵略の銃を取るな：塚越正男の遺言』私家版、1994年。

経験に付随する感情や恩情、中国や日本に対する独特の視点、保守的な地域社会との相克の中での平和行動などに関する記憶が鮮烈であることだった。この点は、歴史認識というものの捉え方を豊かにするものであるという学術的意義に加え、戦争体験の継承という実践的な意味でも示唆を与えてくれる。

以下では、笠が中国にいた時代の資料や帰国後の資料に加え、インタビューの結果も踏まえて笠の足取りを再構成するとともに、彼が逆風のなかで何を伝えようとし、周囲は何を受け止めてきたのかを明らかにすることで、加害認識の拡がりの困難さを浮かび上がらせていく。

1. 笠実の戦争体験と帰国までの転変

1.1 笠の戦争体験

まず、笠が後半生において伝えようとした戦争体験やそこから得た認識について確認しておく。分量的にも内容の詳細さにおいても、戦犯として収監されている際に書いた「自筆供述書」が際立っている（供述書の作成経緯に関する説明は後述）。帰国後に書いた経歴や講演録の内容とも矛盾する点はほとんどない⁴⁾。以下では、主に供述書に基づいてふり返っていく。

笠は1906年（明治39年）2月に福岡県久留米市に生まれ、久留米商業を卒業後、1928年8月から久留米市役所に勤務していた。33歳になった1939年（昭和14年）4月に「当時の戦争熱に煽られて」（62頁⁵⁾）、陸軍の宣撫官採用試験を受験し合格した⁶⁾。同年5月から北京の北支那方面軍参謀部で宣撫官としての訓練を受け、陸軍に随従する宣撫官として河南省や山西省の各地を転戦した。庶務や財務などを担当し、特務機関にも所属している。いわゆる「戦中派」より少し年長の世代で、「志願」して戦争に参加した。宣撫班が華北新民会⁷⁾と合併した後も行政経験が買われて山西省の政府機関の運営に従事した。

4) 帰国後のもっとも詳細な回想録としては、89年12月の講演録である笠実『侵略、その体験と反省 - 鬼から人間へ -』（高教組ブックレット No. 2）（熊本県高等学校教職員組合、1990年4月）がある。

5) 中国中央档案馆編『日本侵華戦犯筆供』第5巻（中国档案出版社、2005年）。以下、頁数のみ表記した箇所は同書からの引用。

6) 宣撫官は、メディアや医療、衛生などの手法を駆使して占領地域の住民を協力させる工作を行う。

7) 日本軍が1937年末に華北地域で樹立させた中華民国臨時政府下で、占領地域の治安強化のため発足させた民衆教化団体。日本軍の軍事行動に積極的に協力し、中国侵略を正当化する

主な任務として、日本軍の占領地域である治安地区において、学校教育や青年訓練、村長会議など民衆との日常的な接触の場を通じ、国民政府との戦争を「東亜新秩序」の確立のためと正当化する宣伝（「反蒋介石」と「中日親善」）の実施やビラの配布（67頁）、現地中国人を教育して秘密情報網を構築するための教育係担当（69頁）、土木工事への住民の徴用・監督、抗日勢力の摘発と拷問（70 - 71頁）、県財政の充実のための重税策（75 - 77頁）、日本軍の食糧調達のための新田開発と住民徴用（78 - 79頁）などが挙げられているほか、婦女の強姦（72 - 73頁）も自白されている。これらについて笠は「このようにして私は日帝の侵略によって貧困に陥った開封市民に対し、施療という偽善をもって民衆の反帝自覚を欺き、中国の情報を探り、〔国府軍の〕開封進攻をさまたげ、デマ宣伝をして民衆を威圧しました」と記している（75頁）。1943年11月から敗戦までは山西省壺関県の政府顧問に就くと、軍政一体となって統治にあたった。当時の意気込みを次のように回想している。

工作の成果は目立つし且直ちに自分の立身に重大な作用を及ぼす。今度こそ俺の手腕を見せてやる、成績をあげて皆をアッと驚かせてやると決意しておりました。だから私の政策を妨害し又は反対する者は徹底的に之を懲罰し殺害し消滅する覚悟で総ての工作にのぞみました。（80 - 81頁）

具体的には、軍需物資および食糧の「収買」（実質的には掠奪）や民衆宣伝といった「本務」に加え、陸軍と行動を共にして抗日勢力や通敵地区とされる村への討伐を命じ、逮捕者の殺害指示も多数出している（82 - 90頁）。

笠のいた山西省では敗戦後も1949年4月まで日本軍が組織的に残留し、国民党勢力と協力して共産党軍との内戦に加担していた。その複雑な経緯に関する詳細は先行研究に譲るが⁸⁾、笠もまたその「山西残留」の一員だった。日本の捲土重来の際の基盤を保持しておくという目的で、部下など20名を残留させて戦闘に加担させ、自身は残留日本軍の指定医院や野戦病院を組織して戦闘を側面支援した。また、民間の残留日本人の親睦と団結を図るための文化活動などを行う「亜州文化会」の事務局組織部長も務めていた（99 - 101頁）。

供述書の末尾には、戦争中の笠の基本認識が端的に記されている。

中国人は文化の程度が低く、永い間の内戦で自国の政府さえ樹立し得ない政治自

る翼賛組織だった。

8) 米濱泰英『日本軍「山西残留」』オーラルヒストリー企画、2008年。

覺の低い民族だから、英米ソに騙されるのだ、戦禍にまみれた中国農民大衆を皇軍の恩威に浴させてやるとの思い上がった気持ちで、中国の平和は日本が衛ってやる、中国人は安心して我について来いという、あくまで主人と奴隷の関係で、口には中日親善を説きました。(107 頁)

共産党軍に敗れ、山西省で二度目の「敗戦」を迎えた後も、笠は中国人に紛れて1年半ほど過ごした後、1950年末に逮捕されて他の日本人残留者と共に河北省永年県の軍事訓練団に収容された。そこでは、農作業などのほか、中国に来てから何をしたのかを書き出す作業が求められた。1951年頃の笠の様子を、同じ収容所にいた戦犯の平野零児が記している⁹⁾。

俺は県の顧問だったが、県民をいためたのは責任は持つが、県長や中国人の官吏がやったことは、自分は知らない、俺には命令をする権限はなかった等と頑張り通して、O、R、O、の三人が初夏の頃、直属中隊に送られてきた¹⁰⁾。三人は手錠をかけられ、私達とは別の小さな一室が設けられた。これを禁閉室と呼んだ。彼等には学習も労働もない、一日中部屋に座って反省し、時々反省した感想を当局に差出すのだということだった。(176 頁)

R はやはり新民会のもので県顧問などをやったりしたが、罪悪事実の重大さというよりは頭から否定してかかる頑固さがとうとう、この中隊送りになったので、彼は亜民会〔亜州文化会〕の始めからその創始時代から暗躍した事実を永い間、白づけていたらしい。(179 頁)

捕虜として収容され、犯罪履歴を書き出すよう求められてまもない段階で、自己の責任を小さく見せようとする思惑があった時期であることを差し引いても、責任を極小化し、より上級からの命令であることを強調する点は、日本兵の戦争認識に典型的といえる。笠をはじめ新中国の戦犯となった兵士たちは、そこから戦争認識を変化させていく点に特徴がある。

9) 平野零児『人間改造：私は中国の戦犯であった』(三一書房、1956年)。同書は、作家だった平野が記憶の鮮明な帰国直後に記した内容で信頼性が高い。太原戦犯管理所に収容された140人の戦犯のうち名字のイニシャルがRなのは笠のみで、内容的にも笠と特定できる。拙稿(石田隆至・張宏波「加害の語りと戦後日本社会(1)」「洗脳」言説を超えて加害認識を伝える 戦犯作家・平野零児の語りを通じて」『戦争責任研究』72号、2011年6月、48-58頁)を参照。

10) 「直属中隊」とは、当時永年軍事訓練団に収容されていた残留日本人(民間人を含めて1,000人規模)のうち、比較的階級や役職が高く、反省が進んでいないとされた人々を収容した別グループ(最終的に100人前後いたと推測される)。1952年末にその多くが太原戦犯管理所に移管され、1956年夏の軍事裁判まで反省や学習を続けた。

1.2 戦犯として示した反省

この後に笠が収容された太原戦犯管理所での出来事については既にまとめた機会があるため概略にとどめ¹¹⁾、笠に特徴的な側面にのみ触れておきたい。同管理所に収容されたのは国共内戦への加担の後で、既に敗戦後7年もの時間を経っていたが、「戦犯」という身分に置かれたことで自暴自棄になる者が多かったことは、前掲の平野も記している。笠もその一人で、「殺すなら殺せ」という態度で、「皇軍兵士」の時代の認識のままだった。日本人・中国人の関係性についての差別的認識を180度転換させることに繋がったのは、管理所側の独特の働きかけがきっかけだった¹²⁾。

第一に、管理所側が報復的な態度を一切とらず、捕虜処遇の国際基準を厳格に守ることを徹底したこと。捕虜は基本的に殺害し、人権を尊重することのなかった旧日本軍との落差を突きつけられ、強固だった中国人蔑視が徐々に揺らいでいった。

第二に、戦時中に持っていた「残虐な共産党」イメージとは正反対の人道的処遇を経験し、中国共産党とは何かという疑問が浮かび上がってきた段階で、階級史観という未知の世界観に触れたこと。幼少期から「皇国史観」教育を受け軍国青年となっていた末端兵士ほど、貧農や底辺労働者としての自身の前半生の苦難を階級的観点から捉え直すことで、侵略戦争や残虐な行為を正当化していた皇国史観が相対化されていった。

第三に、中国に足を踏み入れてからの自己の歩みのすべてを書き出させるという自己反省的教育方針。戦犯らは、日本軍による捕虜拷問を裏返しに捉え、犯罪行為を認めれば処刑されると思い込んでおり、当初は嘘の履歴を書いて提出していた。矛盾点の修正を何度も求められるうちに、嘘をつき続ける自己の醜悪さと、少しでも事実と合致する記述があればその姿勢を評価する管理所側との落差が客体化させられていった。また、時系列を追って丁寧に書き出す作業のなかで、「戦争犯罪」と認識することのなかった戦場での日常的行為、業務としての植民地経営の犯罪性などを自覚させられていった。

11) 石田隆至・張宏波「加害の語り」と戦後日本社会(2)「棄兵」たちの戦後史(上)「認罪」経験の二つの捉え方」『戦争責任研究』73号、2011年9月、48-59頁；同「加害の語り」と戦後日本社会(3)「棄兵」たちの戦後史(下)「加害者」である「被害者」として」『戦争責任研究』75号、2012年3月、67-78頁。

12) より詳しくは拙稿「中国の戦犯処遇方針にみる『寛大さ』と『厳格さ』」初期の戦犯教育を中心に」『PRIME』32号、2010年10月、67-80頁を参照。

この履歴の最終形態が 1954 年夏から秋にかけて書き上げられた「自筆供述書」だった。罪を認めるか否かの葛藤は最も苦しい体験であり、不眠や食欲不振、抑鬱など心身に異常を来したり、自殺を考える戦犯もいたほどだった。しかし、すべてを自白してしまうことで次第に頑なさが消え、自己の加害性を見出すと同時に被害者の苦痛に思いが及ぶようになり、反省が次第に深まって、人間的な感情を少しずつ取り戻していった。

笠もまたこうした経験をするなかで、戦時中の行為をまったく別の形で捉え直すようになっていった。70 頁におよぶ「供述書」の末尾には長文の「反省」が記されており、帝国主義的侵略を積極的に支えた自己のあり方を明確にした「歴史認識」が示されている。

私は以上を回顧して〔久留米市役所の公務員となった〕二十三歳より〔逮捕されて戦犯となる〕四十五歳まで最も私の働き盛りを、天皇の走狗となり、私の立身出世を夢みて実に恐ろしい万死に値する滔天の罪悪を犯しました。忠孝を教えられ天皇の奴隷となり、武士道により天皇の番犬となり、盲目的に天皇を崇拜し、天皇政治を謳歌し、民族優越感をもって中国を侵略し罪悪の限りをつくしました。この罪悪深き私に対し中国共産党と中国人民は寛大な政策を以て、永い間実に忍耐強く懇切な領導をいただきました。(112 頁)

慎重な見方をすれば、これは処刑の回避や減刑を引き出すための「適応」的行為だったと考えることもできる。その当否を判断するには、帰国後の行動を確認していくしかない。なお、撫順と太原の 2 つの戦犯管理所にいた 1,062 名の戦犯の大部分は、こうした認罪・反省が酌量されて起訴免除となり帰国した(笠を含む 45 名だけが有期刑を宣告され服役)。むろん、管理所での認識を帰国後後退させていく戦犯がいなかったわけではない。しかし、程度の差はあれ、少なくない戦犯たちが帰国後もその反省をいかに贖罪の行動へ繋げていくかを考えながら、帰国後の後半生を生き抜いていった。45 人の有期刑戦犯の中には帰国後の足取りがはっきりしない戦犯もいたが、その中で笠は反省に生きる道を貫いた点でも特異な存在だった。判決後に撫順戦犯管理所に収監された笠は、服役中に故郷の久留米市民に宛てて三通の手紙を出しており、そこから彼の帰国前の認識を確認することができる。

1.3 管理所から日本に送った 3 通の手紙

第一信は 1958 年 11 月 20 日付、第二信は 1959 年 12 月 6 日付、そして第三

信は日付が不明であるが、1960年7月5日付で久留米から届いた手紙への返信となっている。ただ、第一信、第二信が久留米の日中友好協会のもとに届けられたのは1960年4月頃である¹³⁾。

三通は内容的には大きな違いはなく、分量がもっとも多い第一信にメッセージは集約されている。当時の日本は日米安保条約の改定とそれに反対する「安保闘争」が社会を大きく揺るがせていた。第一信は、冒頭で1958年10月にアメリカNBCラジオのセシル・ブラウン記者が岸信介首相から引き出した談話の内容に触れ、「いま、日本は戦争か平和か、民族の滅亡か繁栄かの重大な関頭に立っております」(1頁)という問題意識のもとで記されている。岸の発言のなかで笠が問題視した箇所を引用しておく。

岸信介は、“憲法中の戦争放棄に関する条項を取り消す時期はすでに到来した”と公然といい、“日本は軍隊を外国に派遣し、自由世界をまもる戦争の中で十分な作用を発揮することが出来るようにせねばならぬ”と主張しています。また、“台湾の局势は内戦ではない、これは一つの共産主義の侵略に反対する国際戦争である”といっています。彼は公然と“日本の安全にとっては、朝鮮と台湾は共産党員の手に入らないということが絶対に必要である”とわめき立てています。このようにして、岸信介は日本軍国主義の侵略と戦争計画をあからさまにもちだしてきました。つまり、まず憲法を改悪し、次には、アメリカにくっついて、中国とアジアを侵略するというのであります。(1頁)

ソ連や中国といった社会主義政権を敵視し、憲法を改正して第9条の廃止を訴える談話は当時でも物議を醸す内容であり、直後の参議院本会議(1958年10月17日)では野党から厳しく追及されていた。戦時中に商工大臣だった「岸信介の命令によって行った私の犯罪」を徹底して反省した笠からすれば、岸の談話は戦時中との強い連続性を示すものだった。「敵」を作り上げ戦争を挑発しようとする姿勢は、戦前と同じ「中国侵略戦争準備」そのもので、「田中〔義一〕や東条〔英機〕の手ぐちと全く軌を一にするもの」(3頁)と映ったため、かつて忠実に侵略戦争を実行した立場からその危険性を訴えるというのが手紙の主旨だった。山西省の各県で財務補佐官や政府顧問として重税政策

13) 『日本と中国(久留米版)』(日本中国友好協会)第3号附録、1960年4月21日付(以下、手紙の引用は同紙から)。掲載が遅くなった事情は記されていないが、手紙は先に釈放された戦犯が持ち帰る形で運ばれ、その活用方針をめぐって中帰連や日中友好協会との間で検討がなされていた形跡がうかがえる(中国帰還者連絡会編『帰ってきた戦犯たちの後半生:中国帰還者連絡会の40年』新風書房、1996年、72頁)。

戦争の反省はどのように受容されたか：歴史認識の多元性をめぐって

や農作物の強制徴発を行って大量の餓死者を出した自身の罪行にも具体的に触れながら、同じ過ちを繰り返そうとしている日本の状況に警鐘を鳴らしている。

第二次世界大戦で失った数千万の貴い生命の犠牲の結果、世界人民の要求として作られた平和憲法が、岸信介によって、いままさに、戦争憲法に取りかえられようとしています。戦争の罪を犯した私が、これをどうして黙ってみていることができます。(1頁)

最後は、市民への連帯の呼びかけで締めくくっており、判決前の1954年に書いた「供述書」に見られる反省と決意に変わりがないことが読み取れる。

祖国日本の平和、独立、民主をかちとるために、いきる権利を持って勇敢に奮闘なさっている皆様に心からの敬意と感謝を捧げます。市民の皆様！どうか頑張ってください。重大な戦争の罪を犯した私の、ま心からのお願いであります。(7頁)

第一信の後半では、現在の観点からすれば多分に理想主義的ながら、社会主義政権下で急速に発展する中国社会や人々の躍動性について、自身の参観体験をもとに具体的に伝えている。そして、中国を差し迫った脅威とみなす岸の思惑を中国内部の視点から否定する。

日本帝国主義の侵略下にあった悲惨な中国人民の生活と現在の豊かで幸福な生活を対比して、日本帝国主義と私の罪の深さと、平和と独立の貴さを身にしみて反省させられます。況んや自らの手で、その幸福をかちとった6億5千万中国人民が、過去の苦しかった生活、人権をうばわれた屈辱の生活をかえりみて、侵略戦争を二度とふたたび、どうしてもぞみましよう。(5頁)

三通目の手紙を書いて1年あまり後と思われる1961年12月、笠は11年の刑期を満了して釈放された。62年1月に横浜に上陸した時には56歳の誕生日が目前に迫っていた。

2. 「自己批判」と「新しい価値」の体験者として：

帰国まもない60年代前半を中心に

2.1 調査方法

以下では、自身の加害体験を明確にした笠の戦争認識や歴史認識が、帰国後に周囲の人々にどのように受容されたのかを、聴き取りも踏まえて再構成していく。

筆者は共同研究者の張宏波と共に、2011年9月および11月に福岡県久留米

市と柳川市を訪れ、遺族を含めて笠を知る複数の人々に集ってもらい、集団面接を行った¹⁴⁾。笠が帰国してから50年、没後からでも15年が過ぎていたが、一様に笠の放っていた独特の存在感に鮮烈な印象を残していた。

聴き取りの結果、時代ごと、また受容者の世代経験ごとに受け止め方に相違が見られたことから、笠の帰国後の歩みの時系列に沿って検討していきたい。なお、氏名はイニシャル表記とし、調査を行った時点での世代と性別のみを記す形とした。

2.2 戦争体験世代による受容

久留米市の日中友好協会が機関紙で戦犯管理所からの笠の書簡を掲載していることに表れているように、「対共産圏封じ込め政策」が展開されていた厳しい政治状況のなかで「日中国交回復」を掲げる市民運動に携わる人々にとって、「閉ざされた中国」の様子を実際に体験している笠の帰国は待ち望まれるものだった。

帰国後のもっとも早い段階に関する記憶を残していたのは、隣接する柳川市に住むKM（男性80代）だった。1925年生まれ、KMは「満洲国」の葫蘆島で港湾労働に従事していた親の仕事のため小学3年で中国に渡り、瀋陽や承德など中国で5年間を過ごした後、召集されて特攻隊員に志願し、鹿児島で敗戦を迎えた。「五族協和」の理念とは正反対の抑圧的体制を目の当たりにしながら少年期を過ごし、戦後一転してアメリカの統治下に置かれた日本の主権喪失後の悲哀も体験していたため、笠が手紙で示していた「戦争責任」は他人事ではなかった。帰国後1ヶ月も経たない段階で柳川での座談会に笠を招いたねらいを次のようにふり返っている。

現代中国のことをきちんと〔話してもらおうと考えた〕。まだまだ、あの頃は「中共だ」「アカだ」と言ってたひどかった頃だから、もっと正しく中国を認識させるためには、(略)中国の実態を〔知ってもらいたい〕、もちろん『人民中国』や北京放送ではずっと出てましたけれど、ある面でいえば、国が出していたものだから、やっぱりお手盛りで書くから、そういう〔中国寄りの〕一面があるんじゃないかという思いを日本人はもってるわけで、戦犯で苦勞されてきた人なら〔中国政府と

14) 聴き取りは、久留米市(K)、柳川市(Y)、福岡市(F)の各地で2011年9月1日(K1)、同11月4日(K4)、11月5日(F5)、11月5日(K5)、11月6日(Y6)、11月7日(K7)に実施した。以下の口述記録の引用の際には、アルファベットで簡略表記する。聴き取りに応じて下さった全ての方に感謝を表したい。なお、本稿は張宏波との共同研究の成果の一部である。

戦争の反省はどのように受容されたか：歴史認識の多元性をめぐって

は) 反対の立場だから、(略) 私たちが言うよりも笠さんからお話を聞いた方が素直に聞いて頂けると〔考えた〕。(略) 当時は 100 人くらい〔日中友好協会の〕会員のいる地域で、集まったのは 40～50 人だったと思う。(Y6)

具体的に笠が話した内容としては、

自分たちは罪人であるのに、〔管理所で〕こんなふうに〔厚遇〕されてきたんだと〔いう話だった〕。思想教育じゃないかというあれ〔批判〕がとても強いわけですね。だから、そうじゃないなんだ、自分たちが本当に「鬼から人間へ」と〔変わったと〕いうことを話されたわけです、中心は。それと、中国が変わっていきよるといふことも〔話された〕。いわゆる中国共産党というのは、自分たちに対して、日本人なら撃ち殺されるところを、こういうふうにされたという人道主義政策を〔話された〕。(略) 聞いた人たちは「ほぉ」という感じで、中国に行ったことがない人が大半ですから、ただ新聞とか北京放送とかで聞くだけで実態は知らない人でしょう。だから、そういう人たちは初めて聞いて、北京放送とか『人民日報』あたりで出てくるやつ〔内容〕の深い裏付けを得て、やっぱりホントかなという確信を〔得たと思う〕。(Y6)

中帰連会員の一般的な語りとの共通性を感じさせる内容であり、帰国まもない笠がみずみずしい思いを愚直に訴えかけていたことが推察される。ただ、具体的な事実関係として笠が戦争のなかで犯したことの何を話したのかについては、KM の記憶にはそれほど残っていない。KM にとってもっとも印象に残っているのは、笠が徹底した自己批判を展開した点にある。

自分だったらこれだけの自己批判ができるだろうか、と。淡々として自己批判されるでしょう。こっちが、聞いている方が、汗が流れるわけです。(略) 笠さんと話すときはぜんぜんゴマカシはきかないから。(略) ほんとに自分に厳しい方だった。(Y6)

確かに、「満州国」支配の実態を自分の目で見えていた世代である KM にとっては、加害の事実は初めて聞く話ではなく、それ故に記憶にとどまっていない可能性がある。一方、かつて中国にいて「直接でないにしても」一定の責任を感じている KM にとって、戦争の反省とは彼自身の課題でもあったため、大いに刺激を受けたと回想した。実際に、笠の講演録や資料を小冊子などの形に残してきたのは KM であり、笠の経験や自己批判を歴史にとどめておくべき価値あるものと捉えていたことが分かる。

軍隊ではこう〔拷問など〕やってきた、それなのに自分はこう〔厚遇〕されたと、自分がしてきたことを話して自分がされたことを話されるから、もう一番こたえるわけです、みんなに。私も質問したとき、結局どうしてそこまで変われたかと〔聞いてみた〕。つまり「教育」されたのかということを、みんなが聞きたいわけです。（略）ところが、「教育はされていない」と〔いう答えだった〕。自分で自分を自己批判するより他に〔なかった〕、紙に〔履歴を〕書いて出したら嘘ばかり書くから辻褄があわんことになる〔ので〕。（略）〔笠自身が変わっていく〕現実を具体的に話されたってことが、一番日本人にとっては、特に戦争に行ったような私のような人もいて、進んだ人といってもまだまだホントの身体の底から変わってはいない時代ですから、〔驚いた〕。（略）驚いて質問もほとんど出なかった。ビックリしたし、圧倒された。その話を聞き入れざるをえなかったというんですかね。（Y6）

久留米で早い段階から日中友好活動が続けてきた NS（男性 90 代）もまた、経験の基盤を笠と共有しているところがある。NS もまた戦前を中国で過ごし、敗戦後は中国共産党の国家建設作業に「留用」されて¹⁵⁾、1953 年 3 月まで総水利局で建築課長を務めていた。帰国後すぐに日中友好協会に加入し、笠の帰国の際には出迎えに出かけた。友好活動でたえず一緒に活動しているような間柄だったが、「きちんと話したことがあまりない」といい、笠の具体的な戦争体験などもそれほど記憶に残っていないという。NS は笠と同時期に建国の息吹が漲る中国共産党に帯同していたため、「三反五反運動」を経験しており¹⁶⁾、笠と同じように自身の履歴を書き出す作業にも取り組まされ、苦しんだという。「ノイローゼにな」ったが、自分が「解凍されていくような」「非常に大きな威力」のある体験だったと語る（K4）。その苦しい自己批判をやり遂げて、赦されて帰国した笠には親近感とともに敬意を感じていると語った。NS にとって、笠が何をして戦犯になったかはもちろん、それをどう捉え返すに至ったのかについても経験を共有する部分があった。だからこそ、その反省をどう戦後社会で具体化していくかといった関心から笠に接しており、地道な活動そのものに関する記憶の方が強いものと考えられる。「戦犯のわずかな人だけがああいう具合に謝罪するとか〔罪を〕認めるとかではなく、ホントいえば日本人全部が

15) 敗戦後に中国に残された在留邦人のうち、医師、看護婦、工場などの専門技術者、軍の顧問等として内戦中の国民党あるいは共産党に徴用された日本人が「留用者」と呼ばれる。

16) 建国まもない 1951 年から 52 年にかけて、旧社会の思想や慣習を一掃するために全国的に展開された社会改造運動。政府機関や国営企業などでの三害「汚職・浪費・官僚主義」と、私営企業での五毒「贈賄、脱税、国家資材の詐取、手抜きとゴマカシ、国家の経済情報の窃取」に反対するものだった。

ああいう気持ちにならなくちゃいけなかった」と繰り返し話し (K4)、笠のような認罪が戦後の日本社会では行われなかったことを問題視している。

さて、中国に渡る前は市役所に勤務していたことから復職の見込みを持っていた笠だが、定年間近の年齢での帰国に加え、明治期から師団司令部が置かれていた地域の保守的土壌、さらには「戦犯」という身分への風当たりから叶わなかった。帰国後半年近く経った 1962 年 6 月になって、当時徐々に制度が整えられつつあった公民館の主事として勤務することになり、70 歳になるまで 13 年間にわたって社会教育に従事した。次節でみるように青年や婦人に分け入って学習活動を展開した。

笠の立場で公民館主事の仕事を続けることの困難さを繰り返し強調したのが、やはり戦中世代の TK (男性 80 代) である。久留米師団司令部勤務を経て戦後は革新青年として久留米市役所に勤務していた TK は、組織改革を訴えたために役所から解雇され、その後社会党の市議になった後も 1953 年 12 月に市議会から除名処分を受けている (その後、裁判を経て身分回復)¹⁷⁾。保守地盤のなかで革新運動を担うことの困難さを身をもって体験していた TK は、保守派が居並ぶ公民館という土壌で活動するための工夫について、「そこはどうだったのか、教えてほしいくらい」と語った (K4)。なぜなら、笠の減刑嘆願運動にもかかわった TK だが、帰国後は「影では会ってもですね、公民館に行って笠さんと会うようなことは絶対しません」と回顧するほど困難な状況だった。ここでも、笠の戦争体験そのものより、逆風の時代や社会にどう向き合うのかという点において共感していることが確認できる。

2.3 革新思想に関心を持っていた青年たちによる受容

同じ時代にあっても、世代が違えば笠から受け取ったものも違ってくる。

日米開戦の年に生まれた TY (女性 60 代) は、笠について「私たちは〔帰国するのを〕待ってましたからね」と振り返った。高校時代の教師の影響で中国やソ連の社会に興味をもっていたという TY は、高校を出てすぐに日中友好協会に加わった。当時、仲間とともに印刷物を会員宅に配布する作業をしていると、先輩たちが「もうすぐ帰ってくるけん」と話しているのを耳にしたが、それが笠のことだった。「中国のことを知りたい、ということが一番にあるわけですから。まだ情報がなかった時代ですからね。本当の中国のことを、国交

17) TK が 2000 年に自費出版した『かんしゃ』より。

もないし。中国から帰ってこられるから、話して頂きたい」と期待していた(K4)。やがて公民館で働くようになった笠のもとに、青年たちが自然に集まってきた。『毛沢東選集』の勉強会だったとのことだが、TYの印象が興味深い。「学習会は名ばかりだったと思うんですけど、その後の笠さんとの話が楽しくて、みんな集まってきた」「笠さんは〔参加者の話を〕お聞きになるだけ」「自分たちだけでは成り立たないけど、笠さんがいるお陰で寄ってくるという雰囲気をもっておられた」と振り返る。

では笠からどんな戦争体験などを聞いたかと尋ねても、あまり明確な回答は返ってこない。その代わり、日中友好協会の地元青年部で「うたごえ運動」¹⁸⁾に参加した際に、笠が良き相談役になっていたことは鮮明に記憶されていた。1962年9月に花笠踊りを披露することになり、その替え歌を作ったり、振り付けを提案したのは笠だったという。青年たちが平和への理想をもって集いあっていることを喜び合うような内容の歌詞で、「今も歌えます」とTYは嬉しそうに語っていた。

TYの語る笠の心象のうち、もう一つ興味深い側面がある。TYは笠の「若さ」が印象的だと語っていた。既に56歳となっていた笠を「若い」と形容するのは余程のことである。しかもこれはTYだけの印象ではなく、同時期に笠のもとに集っていたWH(後述)も感じていたし、TYと同じ年齢で三池闘争に積極的にかかわっていた当時20代前半の女性と帰国して約1年後に笠が再婚している事実も、それを裏付ける。1980年代半ばに既に80歳を過ぎていた笠と出会い、晩年まで共に過ごしたOC(後述)もまた「60歳くらいの方だと思ったので、びっくりした」と語っている(K1)。筆者らが提供を受けた写真のなかには、帰国間もない頃と思われる笠の写真が一枚だけ含まれている。確かに50代後半にしては若い印象だが、20代女性の恋愛対象になるほどの若さだったのかとTYに確認したところ、「20代女性でも憧れるような存在だった」と語っている。外見上の若さだけでなく、青年たちがもっていた社会主義や新中国への理想が笠に投影されていた側面も大きいのではないかとと思われる。笠自身も自分の体験した理想的な社会を周囲に根付かせていきたいと考えていたため、「住民と接する機会が多い」仕事に意義を感じていた¹⁹⁾。ただ、聴き取

18) 1950年代から60年代初めに全国的に盛んだった革新的理念を合唱によって拓げる平和運動。

19) 中帰連編『二十八年ぶりの再会』私家版、1985年11月、139頁。

りからは、その割に笠は具体的な経験や価値観を自分から積極的に語り伝えようとはしていないようにも感じられる。

TY より少し遅れて、公民館での学習会に参加した経験をもつ WH（女性 60 代）は、1963 年頃に久留米大学の学生が集っていた歴史の勉強会に参加していた。岩波書店の小冊子を使って明治以降の歴史を学び合っていたという。高校を出た後に就職し、学びたいという意欲はあっても実現する機会がなかったため、大学生とともに「その場にいるだけで幸せ」だったと回想している（K7）。明治以降の歴史ということは、笠の戦争経験に重なる時期を扱ったことになるため、どのような話を聞いたのか確認してみたが、はっきり聞いた記憶があるのは戦犯管理所の中にいたことくらいで、その時の詳しい内容や、話を聞いた自分や周囲の反応についてはそれほど記憶がないという。「何かあったような気もしますけどね、自分の中にあまりショックを受けてないから、あまり記憶として残っていない」。学生同士は喧々諤々で議論して時に笠に質問するといった進め方だったなか、WH は「感心してそれを聞くばかり」だった。笠の存在についても、「違和感なく、スッと入っていけ」て、気後れすることなく「その雰囲気そのものに触れるのが楽しみで」通っていたという。ここでも、笠の認識や価値観、反省といったことよりも、笠が作り出している雰囲気に「新しい時代」の息吹や理想を感じていたことが見えてくる。

OT（男性 70 代）はその久留米大の学生として学習会に参加していた経験を持つ。1963 年、大学 3 年生の時に同じゼミの学生に誘われて、笠のいる公民館で開催されていた『帝国主義論』の学習会に何度か参加したという。ここでも笠は講師ということだったが、実際には学生が運営していて、笠から「個人的な中国での経験を聞いたような記憶はほとんどない」（Y6）。ただ、笠の「厳しい姿勢」を感じた言葉を覚えている。学習会の参加者は 7、8 名くらいのことが多く、学生よりも青年やお年寄りの方が多い時もあった。学生たちは文献を「ある程度読んで参加しておったもんだから、比較的流暢に話をしていた」が、その様子に対して笠は「あんたたちの帝国主義論は頭から入ってるんだ」と話したという。文献を事前に読めない若い労働者や高齢の参加者を念頭に置いて、「学生がいうことはそんなに気にしないでいいよ、という感じの話だったと思う」と受け止めている。OT は大学卒業後に教員となったが解雇され、後に熊本で共産党の市会議員を長く務めている。大学を出た後はほとんど笠との接点はなかったにもかかわらず、隣県からわざわざ駆けつけて聴き取りに応

じてくれたのは、学生と市民との間にある壁を意識していない革新青年らに危うさを感じて発された笠の指摘が、教え子や市民の間に分け入って生きてきたOTの歩みの本質を突いていたからではないだろうか。

帰国まもない時期の笠の受容のされ方を、世代別に確認してみた。戦中世代は戦争経験の捉え直し方、あるいは反省をいかに具体化して責任を果たすかといった点を受容していたのに対し、戦後世代の青年たちは笠が新中国を体験していたことそれ自体や革新思想の体現者であることに魅力を感じていた。笠が中国での体験やそこで得た新しい認識を積極的に伝えたいと考えていたことは「手紙」の内容からも明らかであるが、青年たちにはかなり抑制的に接していたのではないかとさえ感じられる。何かを「教える」というより、青年たちの内発性を薰育するような働きかけともいえる。22節でTKが指摘したように、言動に慎重さが求められる公民館という場で青年らと関わる上での一定の工夫としての側面もあっただろう。こうした笠のねらいはどこにあったのか、そして周囲の人々はそれをどう受け止めたのか。

3. 仕事と家庭を通じた平和への取り組み：

60年代後半から70年代半ばまで

3.1 笠自身は自己の歩みをどう捉えていたか

ここまではいずれも笠の帰国まもない時期の周囲の人々の回想を検討してきた。笠は1976年に70歳になるまで公民館主事を務めたが、60年代後半から70年代の足取りに関しては記録、記憶ともに乏しい。前述の青年たちがその後、仕事、結婚、子育ての多忙な時期に入ったことも無関係ではないだろう。笠自身も1971年から77年まで妻が鍼灸師の資格を取るため大阪にいたため、65歳を過ぎて1人で2人の子育てをしながら過ごしている。

この空白期の様子を知る手がかりとしては、中帰連の活動が急激に活発化してくる1980年代後半に個々の会員が書いた「回想録」がある。多くの会員が帰国して30年程度が経った段階で、後半生の歩みを振り返って戦犯管理所に提出した文書である。笠が1987年3月に記した「回想録」を今回、撫順戦犯管理所の許可を得て入手することができた。

それによれば、まず帰国後の仕事については、「中学卒業者の初任給程度の薄給だったが、毎日住民と接する機会の多い職業を選んだ」(1頁)とあり、

公民館主事となったことにも笠なりの積極性が込められていたことがわかる。ただ、上述のような青年たちとのかかわりがあったためか、「市教育委員会からは私に対して『偏向教育をしている』との理由で辞職勧告がきた」が、「『体験した事実を話しているのだ』と反論し、堂々と闘いぬいた」(1頁)としている。公安警察に活動を妨害されたことも記されており、こうした点は他の中帰連会員と共通した体験といえる。

帰国したばかりの時期は「中共帰り」「アカ」といった偏見で苦労したが、「1967年頃になると、昼夜の別なく住民のための社会教育に邁進している私の姿を見て、住民は私を心から信頼しはじめた」(1-2頁)と記しており、帰国初期の苦労が垣間見える。

当初は小学校の講堂の玄関を公民館事務所にし、夜間に講堂を教室代わりにして運営していたが、1968年頃から公民館の新築に尽力し、鉄筋コンクリート2階建ての「金丸公民館」を1972年に完成させた。その後は活動が大きく広がり、「青年学級、婦人学級、老人学級(1クラス30人程度)」を開いたり、「書道、ペン習字、読書会、俳句会、詩吟会、生花、茶道、謡曲、民謡、日本舞踊、和裁、編み物等の教室を開設し、住民の文化の向上に努めた」(2頁)。

また、中国との国交のない時代の数少ない窓口だった日中友好協会の一員として文化運動に励んだ点、文化大革命の影響で1967年に入ってその運動が長期停滞期に入ってしまった点も記されているが、これらの点も笠を含めた中帰連会員に広く共通した体験である。

興味深いのは、これまで検討してきた関係者の印象と異なって、笠本人は公民館でも日中友好協会でも戦争体験を積極的に伝えてきたと記していることにある。

約13年間金丸公民館社会教育主事として、在職中私は機会ある毎に中国での体験を語り、反戦平和、日中友好の重要性を説いてきた。(略)私が公民館を退職した後、婦人学級の私の教え子たちは『魂から魂へ：子供に伝える戦争体験』と題して小冊子を発行した。(2-3頁)

私が帰国した当時、日中友好協会久留米支部は約40名の会員であった。私は、中国での体験談を各方面に講演してまわり、会員の拡大に努めたので一年間で会員は120名になった。(3頁)

ここに記されている『魂から魂へ』(金丸婦人学級発行)に収録されている体験記録をみると、事実面、認識面ともに笠の直接的影響を感じさせるもので

はなく、戦争一般の「悲惨さ」とその「被害」の側面から捉えた内容が多い。1978年（昭和53年）5月に発行されており、戦後「33回忌」という節目で作成された意味合いの方が強いとさえ感じさせる。笠自身も文章を寄せており、戦争色の強い幼少期の様子から戦争体験、戦犯収容経験の概要を描いているが、個人の罪行を記した箇所は数行にとどまり、後の講演録などと比べるとやはり抑制的な書き方をしている。

積極的に戦争体験を語ってきたという笠自身の回想との落差については、こう考えられる。前節で検討した帰国初期に公民館に集まった青年たちの記憶と合わせて考えても、加害体験を直接的な言葉にして熱心に教え込むという姿勢はほとんど見られない。市民が自ら考え、語り、触発しあうなかで、平和の文化を作りだしていく“場”を設けていくことに、笠のいう積極性が発揮されていたといえる。青年たちはそうした“場”そのものに魅力と新鮮さを感じて集っていたことを先に確認した。

これを60年代の地方都市がもっていた保守性に対処する「手段」としてのみ見ていては、青年たちが50年前に受け止めたインパクトの大きさを捉え損ねてしまう。「ゴリゴリ」の軍国主義者だった笠をも変化させていった中国側の働きかけが戦後日本社会にも必要だと感じていたが故に、人を惹き付ける独特の“場”や「観点」を提供できていたと考えられる。笠が示したこうした学びのスタイルは60年代初期にはまだあまり一般的ではなく、青年たちが抱いていた革新思想への理想や期待を裏付けてくれるものだったと思われる。

笠としても、保守的な地域の公民館で学ぶ女性たちが戦争体験を振り返る機会を持ち、彼の退任後にその記録を自ら冊子化した「内発性」の発露それ自体に、一定の前進を見出していたといえる。

3.2 子育てを通じて伝えたもの

70年代の笠に関する記憶を有していたのは、前記のWHだった。

WH自身も結婚後は子育てや仕事に忙しく笠との交流が続いていたわけではなかったが、1970年代初期に、同じ世代の子どもを抱えていたため子育てを通じた交流があったという。その際、保育園の役員としての人間関係の悩みを笠に聞いてもらい、アドバイスをもらったことが何度もあった。WHは「いま思えばですけど」と断りながらも、「純粹でまっすぐだった当時の自分に、バランスの取れた考え方、(略)人に対する優しさとかを教えてもらった」と振

り返っている。

寛大な、あの心だけはホントに学ぶところがありましたね。自分の敵とする人間でも受け入れよというあれ〔姿勢〕だった。(略) 敵としても殺しちゃいかん、そういう話をされたことがあるんですよ。私が人間関係で悩んでたときに。それはいまだに生きてるのかなと思う。いま、民生委員をしてるんですよ。回ったらいろんな人に会うが、(略) ちょっと幅広く考えて人を見れる、優しく人を見れる、そういうのを知らず知らず学ばせてもらったかなと。笠さんのお陰ですね、それは。まだ純粋な時期に知り合ってたね。あの先生も相当苦労されてるので、私たちが苦労したから、そこが相容れるところがあったのかもしれないですね。(K7)

WH が受け止めたものは、赦しえない日本人戦犯さえ平和の担い手に変えていった中国側の対応を内面化した笠の姿勢そのものだった。

一方、笠自身も、妻がまだ小さな子どもを残して資格を取るために大阪に出ることについて WH に相談していたという。「私たちが商売はじめたばかりでものすごく苦しくて、こっちも貧乏してるし、先生の方も貧乏してるでしょ。だから一緒に頑張れ、頑張れという〔励まし合う〕ような子育てですよ」と当時を振り返っている。決して派手な振る舞いも言動もなく、日常的に出会う人々を通じて自分の理念を伝えようとする堅実な日々を過ごしていた様子が窺える。

4. 「日中友好」と「相互扶助」を足元で実践した退職後： 70年代後半から没年まで

4.1 中国から来日する人々の「父」として

1976年に公民館主事を退職した後は、周囲からの視線に左右されることなく、存分に平和活動を展開していた時期といえる。70年代後半から80年代初期にかけては、組織活動の面では日中友好協会も中帰連も文革期以降の低迷が続いており、個人としても10代半ばから後半の子供の教育に多忙な時期だった。それでも、1977年10月の中帰連全国懇親会広島大会には夫婦で参加しており、妻は「中連夫人部」の結成の呼びかけに積極的に賛同している。1978年9月には同懇親会を久留米で開催しており、九州支部長だった笠が受け入れの中心を担った²⁰⁾。80年代前半には柳川でも中国語教室を開催している(Y6)。

20) 前掲『帰ってきた戦犯たちの後半生』412 - 413, 415 - 419頁。

この時期の笠を象徴する活動として関係者の印象に強く残っているのが、(一時)帰国した残留日本人孤児(74年頃から)、中国人研修生(81年頃から)、中国人留学生(80年代後半から)に対する親身な支援である。

前述の KM によれば、残留孤児の一時帰国が始まった 70 年代半ば以降、久留米はもちろん周辺各市に残留孤児が帰国すると、たいていの場合笠のもとに連絡が入り、サポートしていたという。目立った産業もなく、帰国者をサポートできる人材も限られていた同地では、中国語の山西方言まで理解できる笠の存在は大きかったという(Y6)。また、80 年代から晩年まで笠とともに過ごした後述する関係者らも、研修生や留学生を支える笠の姿について、「なんでここまでされるかなぁ、みたいな〔不思議な〕気持ちが傍から見ててもあった」「迎え方に心がこもってましたよ」と振り返る。自宅で生活を共にする形で支援した中国人も 1 人や 2 人ではなく、親子 2 代で笠宅に暮らした留学生もいたという(K4)。

その中の 1 人である TJ (女性 50 代) から話を聞くことができた。TJ は上海の服飾会社から研修生として派遣され、1989 年に来日した。天安門事件の直後ということもあり、受け入れ会社が中国人研修生への管理を強めていた時期である。研修生の時から笠のサポートを受け、翌年笠に誘われると「日本人の家に住む方が、ホントの日本人の生活とか日本人の心が分かる」と考えて、2 年間一緒に暮らした(F5)。笠のオープンな生活スタイルや中華風の食事、中国のことを深く理解し、誰にでも心を開く人間関係の作り方は、TJ にとっては「日本人でもない、中国人でもない」ように感じられ、「生活しやすかった」。一緒に暮らしていた中国人たちも笠を「お父さん」と呼び、笠の長男とはいまも姉弟のような関係が続いているという。当時の生活費はすべて笠が負担していた。

笠の印象をひと言でいえば、「心の底では、中国の方たちにできることを全部自分がやろうというふうにやってるんです。そのへんはちょっと〔一般の人とは〕違う」と語った。当時、笠の自宅は日中友好協会久留米支部の拠点で、80 年代半ばから中国語教室を開いていたこともあって、人の出入りが多かった。したがって、笠宅に住むようになると毎日のように日本人と交流する機会があり、中国語教室もいつしか留学生や研修生が主人公となっていくた。たぐさんの中国人が日本で暮らしているが、「いますごく自慢に思っているのは、(略)私ほど日本の社会に入って、日本の文化とかいろんなことに触れた人は

少ないと思います」「〔笠の家に〕いろんな方がお見えになられて、いろんな日本人の方の違いにも触れたことが自分の財産になっている」と振り返り、「いまでも話したら涙が出るくらい」「そこに住んだことが一生の財産」だと語る。

ただ、TJ もまた、笠の戦争体験を具体的には聞いていない。80 歳代半ばを過ぎていた笠が講演や会議に参加するときには娘のように付き添って出かけることが何度もあり、その時に笠の戦争体験や歴史認識に触れることがある程度だったという。戦争での体験や管理所での経験も少しは聞いた程度で、「〔話さなかったのは〕たぶん私たちが中国人だったということもありますけど」と分析する。「子どもさんより私〔に対して〕の方が（略）〔戦争体験を〕話しやすい関係だったと思うんで」、「聞けばよかったな、今思うと」とも語るが、「自分は決して裕福じゃないのに、そこまでみなさんの面倒をみる」笠の姿から、「やはり罪の意識があったと思う」とその心情を察している。TJ はもちろん、周囲の関係者も、こうした笠の親身な振る舞いが中国に対する自己の戦争責任を償おうとする表れであることを理解している。ただ、笠が中国人たちだけでなく、青年や婦人、子育ての中で出会う人々といった誰にでも心を開き、励まし合おうとしてきたことを考えれば、もう少し大きな次元の取り組みであったことも見えてくる。

4.2 晩年を共に過ごした関係者が受けとめたもの

最後に、80 年代半ばから晩年にかけて、家族のように笠ともっとも長い時間を過ごした関係者の聴き取りを検討する。笠の戦争体験やそれにまつわる認識をもっとも多く聞いている世代である。

高校の国語教員だった NK（男性 70 代）は、笠との交流が深まった 80 年代半ば以前から日中友好協会の会員であり、中国に対する一定の関心と共感を抱いていた。80 年代半ばに久留米の自宅で笠が中国語教室を開くと、発足時からのメンバーとなった。同じく中国に対する関心はあったものの旅行以上に特に何かをしていたわけではなかったという OC（女性 60 代）は、地元でようやく中国語教室が始まったと知り、1 年半ほど遅れて笠の教室に参加するようになった。中国語教室といっても実際には語学そのものの勉強はほんのわずかな時間だけで、残りは笠を交えた参加者が自由に中国や日中関係について語り合う場だったと彼らは回想している。それでも不満はないどころか、笠の口から出る中国観の新鮮さに加え、中国について他では話せないことを気兼ねなく

話せる場であったことを、参加者はかえって印象深いものだったと記憶している。

同じく発足時からのメンバーであった ST (男性 60 代) は「〔中国語の〕勉強の方より〔笠の〕人間的なあれ〔温かさが魅力的〕で、非常に親しみを感じてきた」「人間が大きいというか、懐が大きいというか、そんな感じを受けていた」と振り返る。ST はそこで出会う中国人研修生や留学生との交流も大きな魅力だったと回想し、「過去を反省することは大事だけど、それにずっと引きずられて〔いるのではなく〕(略)、小さな現象に囚われないで、もっと大きな本当の意味での交流ということを持っておられたんじゃないかな」と笠の印象を語っている (Y6)。実際に、彼らは「出入り自由」な「サロンみたいな形」(OC) だった笠宅に頻繁に集まり、世代も国境も越えた繋がりの輪ができていた。笠は「先生」「年長者」であるからといって決して偉ぶることも説教をすることもなく (K1)、内発性をもった個人が対等に繋がり合う平凡な日々からこそ意義を見出しているかのようである。それは、人間を組織の「道具」にしか見ない軍隊の縦型構造や、利害や損得でしか繋がらない戦前・戦後の社会関係を逆転させたものだったといえる。最晩年の笠は彼らや子供に支えられて過ごしていた側面も見られた (K1)。

さて、彼らは笠のどのような戦争体験、歴史認識に触れていたのか。

OC によれば、TY が笠と勉強会をしていた 60 年代初期の頃とは違って、「結構喋ってらっしゃいましたよ。(略) 先生自体からそういう話をずいぶん聞いたから、管理所の話とか太原でのこととか〔を覚えています〕。」と振り返っている (K5)。具体的に記憶に残っている話について確認してみると、「三光作戦」および管理所で反省を深めるきっかけ、管理所での人道的な待遇が特に印象的だったようである。

私たちの世代でも知らなかった言葉が「三光作戦」ですね。そういう言葉を初めて聞いたんですよ。やっぱりショックですよ。そんな奪い尽くし、焼き尽くし、殺し尽くすなんて。ホントに日本がそんなことをやったのぉ?〔と思った。〕そういうところからスッと関心を持ち出したということがありますよね。三光作戦みたいなことを先生はよく仰ってました。そういうことを日本軍はしたんだと。(K1)

確かに笠がいた山西省でも三光作戦は展開されていたが、笠自身の戦争体験のなかでは周辺的な犯罪にあたる。日本軍の残虐性を代表する一般的な話として伝えていたのだろう。

戦争の反省はどのように受容されたか：歴史認識の多元性をめぐって

また、戦犯管理所のなかで笠が変わり始めるきっかけとしては、

「軍国主義にまったく染まっているその考え方は、みんなの中では自分が一番強かった」と言われたこともありました。(略)だから、「自分のようにゴリゴリに固まっている者の考えが変わるというのはどういうことだろうって、かえってそういう点が疑問に思う」というようなことも仰っていました。「自分の考えを変化させる共産党ってなんだったことを勉強したいって思った」というふうに言われました。(K4)

と、笠の回想を記憶している。一方で、その具体的な変化の内容や経過については、管理所の待遇がきわめて人道的なものだったという話に比べれば、それほど具体的には聞いていない。

NK の記憶に残る笠の戦争体験や認識としては、主に3点があげられた。まず、山西省の県政府顧問時代に捕らえ拷問していた捕虜について、

「まだ本当のことを言いません」と〔いう部下からの報告を受けて〕、「ああ、もうそろそろいいんじゃない」というようなことを自分がいうと、処刑することになる。直接自分が手を下したことはないけども、そういったような形で中国の人たちを、殺したんだということを言われたのは、非常に心に残ってますね。(K4)

次に、認罪の過程については、以下のような管理所のアプローチが印象深かったという。

紙を渡されますね。で、「これを書きなさい」と〔言われる〕。で、書くと。またしばらくして、「もう一度書いてみなさい、本当にこうでしたか」と〔言われる〕。どこが間違っているかとか一切言われない。紙を渡されるだけ。そういう時に「何回書くんか!」と思ってた、と〔言われた〕。「ホントのことを書いたらね、奴等は殺すに決まってる。だから、絶対書きやしないと、そういう思いがずっと続いた」と仰ってましたね。(略)かなりそうした猜疑心といいますか、長く持ってたんじゃないかなあという印象をもちましたね。逆に、自分たちが、日本軍がそういうことをしていたという裏返しで捉えているわけですね。(K4)

それでも、「最終的にはそういうものをすべて明らかにしてスッキリした形で帰ってこられたその反映が、私たちの目の前でそういうこと〔自分の戦争犯罪〕を言われた、言えたのかなあと思います」(Y6) とふり返っている。

三点目は、撫順管理所での待遇について。

戦犯管理所でのいろんな中国側の思いやりの話を、非常に感銘を受けて聞きました

た。たとえば、あるとき〔管理所の〕看板が外されていて、どうしてかとみんなびっくりしたところ、所長がいうには、「中国人民はいま食べ物も食べられないような状況のなかで、日本の戦犯、私たちの肉親を殺したあの戦犯の連中が白米のご飯を食べている、正月には餅もつかしてもらっている、それは〔外に知られたら〕大変な騒ぎになる、そういう恐れがあるので、これを外しました」というのを聞いて、非常に感銘したということを言われたのを今でも覚えています。(略)そういう一つの思い出が、その後中国に留学したり、中国の方と話をしたり、いろんなところで共通したのを感じますね。中国の方はほんとに思いやりがあると思うことが結構ありますよ。そういうのがダブって、〔管理所での話を〕思い出すんじゃないかと (K4)。

これらの記憶は笠の周囲にいた他の関係者からも聞かれる話だが、NK と同じように長い時間を笠と過ごした OC の記憶は少し違っている。

それほど酷い話は一度も〔聞いたことが〕ない。〔笠〕先生は男性だけいるときに話されたのか……、何度も紙を書かされたとかそういうことは聞いたけど、人を直接に、酷いことをしたということは聞いたけど、具体的なこと〔殺害命令など〕を一度も聞いた覚えがないんで、先生に何度か、「なんで管理所に入ったの？」ってことは言ったんです。初めに聞いたときは「新田開発だ」って言われていました。それははっきり覚えています。市に務めていて、派遣されたから行っただと。宣撫官のような話は一度もされなかったです。後の方になって、ほんとに宣撫官だったというようなことは言われたんですけど、そういう具体的な生々しい話は一度も聞いたことがなかったんで、私は逆に、先生はなんでそんなに長く入ってなきゃいけないんだらうと、自分で推察をしたんですよね。(略)〔罪行として〕何をした、っていうことは聞いたことがなかったんですよ。(Y6)

公民館主事時代にあった制約のなくなった時期に、過ごした時間も長かった NK や OC、あるいは研修生だった TJ らが耳にした笠の経験や認識もまた、供述書はもちろん帰国後の講演で語った内容と比べてもそれほど詳細ではない。しかし、笠から聞いた戦争の実態や笠を反省させた中国のあり方などは十分に印象に残る話として記憶されており、具体的な経験それ自体というより「日本軍の加害性」や「中国側のまなざしを踏まえたものの見方」といった「視点」「観点」、あるいは生まれ変わらせてくれた中国に対する「恩情」「感情」という形で笠のメッセージはかなりの程度受容されていた。また、それらは笠からの一方的な影響というより、笠に触れたことがきっかけになって学びが駆動し

ていった側面もみられる。OC は自分と中国とのかかわりが笠に触れることでどう変わってきたのかを次のようにふり返る。

〔笠の話を聞いて〕本当かな、と思いましたね。先生の話が本当かなということじゃなく、先生を信じないっていうんじゃなくて、ホントに日本はそんなことをしたのかなという気持ちが強かったですね。だから私も正直に言って、それからいろんな本を、中国に関するいろんなことが書かれている本を真剣に読みましたね。実際ホントはどうだったんだろうかという気持ちが強かったので。本を読んでもいろんな見方がありますよね。それから中国に行ってみたいという気持ちが強くなって、旅行で行ったりしたけど、旅行だけではとても分からないと思い、言葉も覚えたいというのもあったので、上海に行っ〔て2年間留学し〕たんです。(K1)

NK も笠から受け止めたものが今にどう活きているかについてこうふり返る。

笠先生はじめ向こうの方〔中国人〕と接するなかで、多様なものの見方ができるようになりましたね。大きなものの見方ね。それを知らないならば、尖閣諸島の問題が起きれば、「とんでもない」とその1点だけしか見えない、他は見えない〔ようになりかねない〕、そうならなかったのは良かったと思いますね。(K1)。

とはいえ、笠のものの見方を無批判に受け入れているわけではない。OC は天皇制や日本古来の伝統文化に否定的な笠の態度に、「違うかなと思う面もあった」「ちょっと寂しいなと思ったことがありました」とふり返る。「それ〔天皇制〕でもって自分〔笠〕が間違っただ道を歩んだっていう思いが強かったと思います」と笠の姿勢を理解しつつも、複雑な思いを持ち続けている(K1)。そして、自分たち仲間内では実に楽しそうに過ごしていた笠が、地域社会にはあまり溶け込んでいなかった原因に、そうした笠の発想が影響しているとみている。「周りの方たちからみれば、あの人は共産党なんだというような方がまだあった(OC)とし、笠と地域社会の双方の間で「世間付き合いでは、なかなか難しい面があった」(NK) ことが指摘されている(K1)。分からせよう、教え込もうとはせず、自分から気付いてもらえるよう働きかける笠の内発的なアプローチの限界が表れていたともいえる。中国を理解しようとする人々を一方的に危険視する地域社会の人々のあり方は、管理所で認罪する以前の笠自身の姿であることに笠も当然気付いていただけに、利害ではなく相互扶助に基づく社会関係を、教化・矯正ではなく薫育・内発によって生み出していこうとして、まず身近な人々にかかわろうとしていたことが見えてくる。

おわりに

笠の周囲の人々が受け止めたものは、戦争にまつわる笠の多様な経験そのものやそこから導かれた教訓というよりも、それらを捉える観点や感情、中国の社会・文化的背景、日中間の歴史的文脈といった形を取っていることが見えてきた。笠の戦争経験や認罪体験もごく基本的な部分しか共有されていないにもかかわらず、日本の侵略・加害の側面を明確にした歴史認識の重要性は周囲に一定程度共有されていた。

ここから導ける知見としては、歴史認識とは歴史事実や直接的体験だけで構成されるのではなく、感情、ものの見方、先入観、社会的・文化的要因、戦争後の体験等から多元的に構成されているということである。これは一般的な歴史認識の定義に収まらない捉え方であり、歴史認識をめぐる現在の国際的葛藤を捉えるうえでも重要な観点だと考えられる。従軍「慰安婦」の存在や南京大虐殺など繰り返し取り上げられる歴史認識上の争点も、「歴史事実」としては政府の公式見解でも認めている。しかし、これを受け入れようとしない政治家が後を絶たず、出版物やネット上でもそれを否定する言説が広がっている。そうした動向が「感情」や「先入観」と無関係ではないことは度々指摘されている一方で、それらを歴史認識を構成する要素として捉える発想は今のところ乏しい。筆者らはこうした問題意識に基づいた調査研究を既に開始しており、歴史認識の多元的構成を明らかにすることで、その相克について引き続き考察していきたい。